

果敢な決断と不退転の実行力

大西 正 男

昭和五十五年六月十二日早暁、故大平総理の訃報に接したのは、選挙区の高知県宿毛市にいたるときでした。折から、わが憲政史上はじめて行われる衆参両院同日選挙の真最中で、私は公示以来、閣僚として全国各地のわが党公認候補者の応援に駆け回っていて、自分の選挙区に帰ったのは、ようやくその前日のことでした。総理の逝去に伴い、同日午後、急遽開かれることになった閣議に出席のため、予定を変更して直ちに宿毛を発ち、一旦、高知市の自宅に引きあげました。

自宅では、すでに待ちかまえていた地元のテレビや新聞の記者諸君と会見をもちました。席上、問いに答えて、大平さんは深慮遠謀の政治家だったと思う。内外ともに重大な時期に、国と党の最高指導者を失い痛惜にたえない。大平さんは平素、ご自分でも、若いときに身体を鍛えているから健康には自信があると申されていたが、それにしても首相のスケジュールはきわめてハードで、ことに北米州訪問以来、その極に達していたようだ。さすがにタフな首相も過労のため入院の余儀なきに至られたものと思うが、多少長びくことはあっても、必ずよくなされるものと信じていたので、私としては大変ショックだ。

八 年代は何事も予測し難い不安定な時代といわれているが、それだけに政治の安定が何ものにもまして望まれる。われわれはこの選挙を総理総裁の弔い合戦と心得て勝ち抜かねばならない。などと話しました。

大平さんとはじめてお近づきねがったのは、大平さんが最初に外相に就任された際、「わんわん会」で、そのお祝いをしたときだったと記憶します。この会は衆議院の成年生れの与野党議員で作っている会のことで、いまもつづいています。

大平さんが二度目の外相になられたとき、私は前任の福田外相の下で政務次官をしていましたが、政務次官の交代は大平さんのそれに遅れますので、確か一日か二日だけ大平外相に仕えたように思います。

この二回目の外相時代、日中国交正常化を、それもサンフランシスコ体制を堅持するなかで達成され、またそれに基づく諸協定を結ばれました。当時、私は党の政審に席をおいていましたが、それらの過程を通じて正常化を志向する内外情勢の推移に対する外相の卓越した洞察力、機を見るに敏な対応、しかも周到な準備と布石、果敢な決断と不退転の実行力といったものを、よそながら感じ、非常に感銘を受けました。私が記者会見で、深慮遠謀の政治家と申しあげたのは、こうした背景をも踏まえての発言でした。

その後、幹事長時代に、私は副幹事長として一年間仕え、最後に、第二次大平内閣の郵政大臣として台閣に列しました。その幹事長時代であったか、あるいは閣議の前後の雑談の際であったか、いまだかでありませんが、あるとき、大平さんが、「日本人は挨拶の民族だ。人を動かすのは必ずしも論理でなく、足と汗と涙と、それに言葉はわるいが、おどしとすかしだ」と、最後の方は冗談めかしていわれたことを思い出します。大平さんは時に好んで逆説的な言い回しを用いられることもあったようですが、その言葉の裏に、深い人生体験にもとづく一種の哲学と強靱で不屈な精神を秘められていたように思います。

大平さん、どうか安らかにお眠り下さい。

(衆議院議員・第二次大平内閣郵政大臣)